



法の水

大正大学講師 高橋 秀城 (49)

天の川に紅葉を橋に渡せばや
たなばたつめの秋をしも待つ
（古今集 不知）

（天の川に降り敷いた紅葉を、懸橋のようにして渡したいと、七夕姫は恋人がやって来る秋を待っているよ）
陰暦七月は「文月」とも呼ばれます。これは、七月七日の七夕に、文な

どを開く「文ひろげ月」を略したからとか（奥義抄）。本来、七夕は旧暦七月七日（今年は八月九日）に行われた、立秋を過ぎてからの秋の行事でした。

冒頭の「天の川」の和歌でも、彦星が訪れてくる秋を心待ちにする織姫の心情が詠われています。初秋の紅葉は早い気もしますが、彦星を迎えるために錦の絨毯を敷き詰め



陰暦七月には、御先祖をお迎える盂蘭盆会が行われる

たのでしようか。あるいは織姫の熱い想いが木々を色づかせてしまったのかもしれない。いずれにしても織姫の心の内には、季節を先取りした美しい光景が広がっていたのでしよう。現在の七夕は梅雨の最中ですが雲間の遙か彼方に思いを馳せてみるのも趣がありそうです。

七夕と同じように、陰暦七月はお盆（盂蘭盆）の月です。七月一日はご先祖様が家々に向かつて出発する日とされ、また地獄の釜の蓋も開くことから、茄子畑や芋畑に行くと大地に耳を近づけると、蓋の開く音や旅立つ声が聞こえてくるという言い伝えもあります。

七夕の日は、お盆までの折り返し日として「七日盆」「盆初め」と呼ばれます。お墓掃除や井戸さらえをし、食器や家具などを洗い清めます。七夕は、ご先祖様を招く「魂祭り」の準備を始める日でもあるのです。この日は水に関わることから、少しでも雨が降ったほうが良いとも言われますが、七夕伝説を思えば「梅雨の宵明け」を願いたいものです。

盆月の間は、ご先祖様をお迎えする意味からも何時にも増して清らかな生活が求められます。それは「身体」や「心」はもちろんだ、言葉遣いにも言えることでしょう。例えば仏教では、真実でないことや、嘘をつくことを「妄語」として戒めています。兼好法師（一二三頃〜一三五二以後）は「徒然草」の中で、世の中の話のほとんどは虚言（嘘偽り）であると語り（七三段）、虚言に反り（七三段）、虚言に反り（七三段）の姿を描き出すなどしています（一九四段）。人間は、騙すつもりはなくても結果的に相手を振り回してしまったり、根も葉もない噂話を信じてしまったり……虚言の世界から抜け出すのは容易なことではありません。

妄語に関わる古い話に、次のようなものがあります。昔、紀伊国に観規という老僧がいました。ある時、十一面観音菩薩の木像を彫ろうと誓いを立てましたが、手助けしてくる人もなく、次第に月日を重ねても弱くなり、ついに、願いを果たすことなく延喜元年（九〇一）二月十一日に八十有餘歳の生涯を閉じました。ところが、二日後のこと。観規は生き返り、弟子の明規を呼び寄せて「一言言い忘れたので帰ってきたのだ」と語りました。座敷を整え、食事の用意をさせると、そこに有力な信者を招き、観規は跪いて語り始めました。「私は命が尽き、仏像を彫り終えずに世を去りました。どうか、仏像を完成させるといふ私の願いを、代わりに叶えていただけますでしょうか」と。すると皆は嘆き悲しみ、涙を流しながら「必ず成し遂げます」と答えます。

折り折りの記 (83)

登山靴穿く程もない高尾山

波多野 重雄

都心から四十分程で私鉄電車の終点が高尾山口駅。敢て、仰々しく登山靴に身を固めなくても「おそうじ小僧」の高尾登山口より、園児らの遠足コースの一号路を運動靴で登れば、揚羽蝶の舞ふ「蝶の道」に突当たる。

昔から「夏山蒼翠にして滴るが如し」という。高尾山では、今、全山緑に包まれて、山百合の花が咲き、琵琶滝・蛇滝の滝飛沫が、岩煙草の可憐な花を咲かせている。

（高尾山健康登山の会々長）

訪中国海南島

遊三亜

厚木市 荒井 一雄

椰子林中間人声
明月照沙紅如星
一步一步入碧海
大波小波洗我性

中国 海南島を訪れて
三亜（海岸）に遊ぶ

蘇東坡の
流されし島の人心こそ
温かくあり ほとと和めれ

椰子林の中に、
人の声を聞く・・・
明月、海沙を照らし、
（海沙の）紅なること、
星の如し・・・
一步、一步、碧き海に入れば、
大波・小波は、
私の性（前世の業）を洗はん
ことよ・・・

観規は立ち上がって礼拝し喜んだのでした。さて、さらに二日経った十五日。弟子の明規を呼んで、「今日はお釈迦様がお亡くなりになった日だから、私も死のう」と言います。弟子は頷くこととしましたが、師匠の慈悲深いお姿を見ていると、愛に堪えられず、偽って「今日は十五日ではありません」と答えました。観規は「どうしてそのような虚言を言うのか」と話しかけると、身体を清浄にして跪いて合掌し、手には香炉を捧げ持って大往生を遂げたのでした。

（『日本霊異記』）

この話の中で、弟子の明規は、師に嘘をつきました。師が現世から消え失せる辛さに、堪えかねたのでしよう。これは責められるべきことでしょうか。

「心内にあれば色外にあらわる」（『大学』）という言葉もあるように、日頃から師を慕う気持ちで、自然と虚言となつて

表れてしまったのかも知れません。師との最後の会話では、虚言を言ってしまった明規でしたが、師の往生を見届けた後は、篤信の信者とともに十一面観音菩薩像を完成させました。師の遺言を守り、立派な開眼供養（仏に魂を迎え入れる法要）を営むことによつて、師への愛着の苦しみからも解き放たれたのではないのでしょうか。

人を誇りては、己が失を思ひ、人を危ぶめては、己が落ちん事を思へ（『沙石集』）

（他人を悪く言うときは、自分の誤りを考え、他人を不安にさせるときには、自分が危険にさらされていることを思え）

明規の師に対する離れがたい思いのように、お盆にお迎えしたご先祖様に対しても、帰るべき日を偽ってしまいたいようになります。そんな時、ご先祖様はどのような真言（真実の言葉）で答えてくださるのでしょうか。

（栃木北部教区普濟寺中）

高尾山法類会

去る六月二十日、高尾山の縁故寺院の集まりである高尾山法類会が、八王子市内の割烹・伊奈喜で開かれ、大勢の参加者が集まり、和やかな雰囲気の中で法類会が行われました。

菅谷執事長の御挨拶により開会され、続いて金子恒順法類会長の挨拶を頂きました。その後議事は進行され、新入会員の神奈川教区・金泉寺・小川英明住職が紹介されました。

その後の懇親会において、参加者は歓談のひと時を過ごされました。